

〔饅頭屋本節用集草奈木檜木ナラノキ〕

奈草木

〔書言字考節用集六生植〕 檜ナラノキ 柚コナラカシ 鉤コナラ 栗コナラノキ

〔圓珠庵雜記〕なら。とかじはと。同じものなり。

新撰六帖、さほ山のならのかしは木またはへのもとつはしげみもみぢしにけり、

〔白石子筆語下〕一讀倭人歌の事、古人讀之意趣と後俗の解し候て、物に名づけ候意とをのづから別れし事のやうに、かねて存寄たる事に候、其故は仙覺等の説にも、ナラの葉と申すは、ナラくとしたる葉と見え候、此ナラくと申すことぞ、古語の柔かなる貌を申す所と見え候歟、次にカシワと見つけ候葉の事、かねても申述候ごとく、古上世より以來こなたの俗、食物を盛り、食物を蓋ひ候て用ひ候には、必らず葉を用ひ候、キナラノヒロハルとも申候て、柔にして大きな葉をば、殊に用に中れるものとし、必しもその木の葉とさしさだめたるものとはなしになにともあれ、膳に用ゆべきものをば、カシワと申したる事にて候、此事ふかくも心得わかつがたき事にや、三綱葉などの事も、とやかくと申す事にて、伊勢の神供に用ひられ候ものは、よのつねにかはり候事と申す歟、葉字讀てカシワと申すにても、事はわかれ候べく候、尊兄御發明の黃鸝の義と同じかるべく候、かかるを後人カシワといふものを、必らず其一物ある事と心得るよりして、事はむづかしくなり候歟、但しむかしおほやけにして、膳職の用ひる所は櫛葉にかぎり候事と見え候、生なる干たるなど貢し諸國の例など式に見え候、き、○下

〔和漢三才圖會山果〕 檬音
和名奈良、俗云古奈良、

安、曾樹高丈許、葉花實如斛祚之輩、秋用紅葉詩人以賞之。

古今要覽稿

奈良は倭訓栞に云、奈良を日本紀に平とみえたり、よて平城ともいへるなり、ならの葉の名にお